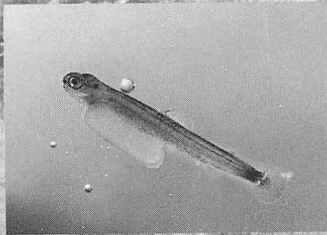


石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第16巻 第3号



尾口村^{ふかぜ}深瀬のイワナ養殖業

かつて、イワナは“幻の魚”といわれていました。その姿を見たり、賞味したりするのは、一般の人にとって難しいことでした。しかしながら、近年イワナの養殖が盛んになってからは、旅館やレストランで手軽に味わうことができるようになりました。

尾口村深瀬の坪田一さんは、長年イワナの養殖に取り組み、現在では卵を孵化させて稚魚・成魚を育てています。水温や水質の問題等もあって、卵から成魚にまで育てるのは技術的に多くの難問がありました。それらを克服して今では他の養魚場にも種苗(10gくらいの稚魚)を出荷しています。白山麓は、年間を通して清潔な水が豊富にあるので、イワナを養殖する環境には恵まれているといえます。

手取川の植物



古池博

手取狭谷

手取川は白山を源流とし標高差2,702m、流程77kmを流れ下り、美川町から日本海に注ぐ石川県最大の河川です。

手取川の植物については、従来白山ほどには関心が持たれず十分な調査・研究が行われてなかったため、二、三の興味深い事実のほかはあまりよくわかっていませんでした。数年前から系統的な調査が進められるようになり、河川地形との関連において手取川の植生や植物相の特徴がしだいに明かになりつつあります。

ここでは、いくつかの重要な事実を紹介するとともにその保護の必要についても述べたいと思います。原稿を読んでいただいた里見先生に御礼申し上げます。

手取川はその河川学的な特徴からつぎの3つの部分に区分できます。

- ・上流域（山の区域） 御前峰から尾添川合流点まで (2,702m~240m)
- ・中流域（谷の区域） 尾添川合流点から天狗橋付近 (270m~70m)
- ・下流域（平野の区域） 天狗橋付近から美川河口まで (70m~0m)

これらの区域はそれぞれ河川としてのふるまいや地形上の特徴がありますが、これに対応してそれぞれに特徴的な植物・植生が分布しています。一般に上流域では侵食作用が、下流域では堆積作用が卓越し、中流域では両作用が対抗関係にあるとされていますが、具体的な河川では局部的にはなかなか込み入った関係になっています。手取川の場合には中流域に「手取峡谷」とよばれる、比高30mにも達する長く深い峡谷が発達しているのが一つの特徴で、植物や植生の分布上でも特に注目すべき場所となっています。

以下、具体的にいくつかの植物や群落を取り上げてみましょう。

タマアジサイ、その分布のなぞ

市ノ瀬から別山への登山道は柳谷川の左岸に沿って高度をとり、やがてチブリ尾根に達します。この登山道の入口付近はトチノキやサワグルミ、カツラなどの巨樹からなるすばらしい溪谷林（ジュウモンジシダーサワグルミ群集）の下をくぐって延びています。夏にこの道を通るとタマアジサイの美しい紫色の花や特徴のある円いつぼみがたくさん見られます。

タマアジサイは、日本固有の植物でしかも福島県以南の関東地方および中部地方にだけ分布する種です。県内では手取川上流域、山中町（大聖寺川流域）、石動山からその分布が知られていました。近年わたくし達の調査で従来から知られていた市ノ瀬付近・釈迦新道などだけでなく、さきに述べたチブリ登山道をはじめ、やや下流の手取川ダム湖右岸の大嵐谷、左岸の深瀬下流などにも広く分布していることがわかりました。特に興味深いのは中流域の綿ヶ滝付近にも分布する事実が判明したことです。

タマアジサイは、溪流の崩壊斜面にフサザクラなどとともに生育しているのが普通で、この群落にはタマアジサイーフサザクラ群集の名称が与えられています。手取川でも同様の群落を形成し、山側でジュウモンジシダーサワグルミ群集、ケヤキ群落、ヒメアオキーウラボロガシ群集などに接続するのが通例です。

ところで、分布の話に戻りますが、このような崩壊斜面は県内では犀川をはじめ多く見られるのですがどうしてもタマアジサイは見あたりません。フサザクラも同様に、県内では手取川流域以南だけに分布します。

ところが、白山山系の東側を流域にもつ庄川の支流ともいうべき小矢部川流域ではタマアジサイーフサザクラ群集の分布が知られているのです。たとえば、医王山の東斜面は小矢部川の上流域になりますがその小院瀬見や、下流域の支流の流域である二上山付近には分布の記録があります。この二上山には、低地型のブナ林がアカガシ林に接続して生育している興味深い土地ですが、タマアジサイも分布することが記録されています。石動山はもう少し北になりますが、ここでも低地型のブナ林があることは共通しています。

さきののべたようにタマアジサイは関東・中部地方の太平洋側に分布の中心をもつ種類です。そして今までに確かめられた事実によれば、石川県はまだその分布がごく部分的で進出がおくれている周辺地域ということになります。話は推測になりますが、たぶん手取川への分布は、長良川ぞいに分布を広げてきたタマアジサイが岐阜県郡上郡の白鳥や蛭ヶ野あたりで山を越え、庄川、九頭竜川、手取川など日本海側の流域に進出したものでしょう。大聖寺川（山中町）流域の分布は、九頭竜川からの山越えでも説明することができます。むろん、神通川流域からなど他の経路にも可能性があることは否定できません。

溪流の植物が山越えて進出するというのはいかにも奇妙に聞こえますが、タマアジサイの種子には、フサザクラと同様に羽根があり気流によって散布する植物なのです。尾根には通常これと交わる方向に谷ができ、風の弱い季節でも山谷風はこの谷を通過して上下方向に吹きますから、十分説明可能です。タマアジサイは本当はどの道を通って手取川にきたのでしょうか。

半安定帯に生育する稀産の植物たち

オキナグサ、センボンギク、ハイタムラソウ

手取川にはオキナグサが稀産します。本当に数が少なく株数が数えられるほどです。植物全体に白くて長い毛が生えているのでこの名がつけました。この植物は本州・四国・九州などに広く生育するだけでなく、朝鮮や中国にも分布します。石川県ではまことに貴重な植物ですが、太平洋側などでは日当りのよい草原・野原にしばしば見られます（ススキクラスの標徴種）。問題は石川県では草原ではなく河川の半安定帯に限定して分布することです。

河川の横断面は、水域、不安定帯、半安定帯、安定帯に区別されます。水域はいわゆる川の区域で水や土砂・粘土（碎屑物）などが常に運動しているところです。安定帯は段丘面や堤防などで数年に一度程度の洪水の際に植生が水や碎屑物の攻撃を受けますが概して安定な区域です。自然に放置されていますとアカマツ、コナラなどの森林群落が発達していきます（このような生い立ちをもつ安定帯のアカマツやコナラの森林が、その意義が理解されないまま失われていくことはとても残念です）。不安定帯というのは沿水域のことで、水位の変動にともなって植生が一年のうち何回も攻撃を受ける区域で、生活環の回転のはやい雑草の生活域です。また、半安定帯は一年のうち高水位の時期だけ植生が攻撃を受けることがある区域です。

わたくしたちの調査では、手取川本流の全流程には主な植生が60余りあることが明らかになりました。それらの群落は、場所によって相違がありますがどこでも水域から安定帯に向かって規則的に配列するので、これを立地系列といいます。手取川のおもな立地系列は10ありますが、源流の御前峰付近と美川河口では全く違っていています。立地系列はちょうど刺身を並べたように河川の継断面上に並んでいるわけです。

どうも前置きが長くなりましたが、手取川のオキナグサは半安定帯を中心に生育しています。その理由はよく解りませんが、手取川への進出があまり遠い昔のことでないとする、よく理解できます。一般に新しい地域へ進出した種は、その地域の在来種となじみにくく、安定した群落の構成に加わることがむずかしいからです。なお、富山県でもオキナグサが黒部川など数箇所から知られていますが、いずれも分布地が河川であることが注目されます。オキナグサのそう果には花柱が伸びて3—4 cmの軸があり、これに毛が密生して羽根となり、風により散布します。

よく似た環境に生育するものに、センボンギクがあります。これは、学名からわかるようにノコンギクの亜種に位置づけられるもので、葉がきわめて細く茎が叢生し頭状花序が小型のものです。中部地方の河川からだけ知られており、石川県では手取川の特定の場所にしかありません。これもそう果は冠毛を持ち、気流による散布者です。

これよりやや日陰で湿った環境に稀産するのがハイタムラソウです。北陸の特産とされますが、県内では手取川支流の大日川で見つかり、最近では手取川本流でも見つけました。散布するのはいわゆる分果で2 mm程度の小さいものですが、そのほかに多年草で茎が這うことができますので、これによっても分布をひろげることができます。

日本海側北限地のユキヤナギ

手取峡谷の福岡橋付近を春に訪れると、野生のユキヤナギの満開で峡谷が真っ白のヴェールで被われているのが眺められます。ユキヤナギは日本の代表的な峡谷の植物で、峡谷のほか、山地の崩壊斜面に生育します。太平洋側では関東以西が分布域で、文献によりますと少なくとも福島県あたりまで自生しているようです。この植物は庭の植え込みによく使われるので、自生しているものに「野生化したもの」との解釈が与えられている場合が少なくありません。手取川のものもそのように考えられてきましたが、ユキヤナギ群落を構成するマルバハギその他の植物との馴染みの良さや生育域の広さ、形態上の特徴などを考えあわせると、もともと野生のものでしょう。分布域が西日本を中心にまとまっていることも根拠になります。実は、「野生化」説は日本のユキヤナギ全体について中国産のものであるという説にもとづいている場合が多く、具体的な証拠があるわけではありません。中国の文献では、華東が原産となっています。中国にはいろいろの灌木林が発達していますが、マルバハギなどハギ属を優占種とするものは、シモツケ属を伴っていることがまれではありません。手取川のユキヤナギが前述のように野生だとすると日本海側ではここが北限になり、まことに貴重な生育地です。

ところで、ユキヤナギの3mm程度の袋果が成熟するとやがて1mm程度の小さな種子がでできます。特に羽根のようなものはありませんが、どうして散布するのでしょうか。じつは、ハイタムラソウの場合もそうでしたが、この大きさが秘密なのです。川の流れがあるとき、砂や土の小さな粒子が流れに乗って移動（浮遊）していることはよく知られています。また、底では水の流れがより大きな粒子を押し流し（掃流し）移動させます。同じような関係が、気流（風）と種子の間にも成立します。種子と気流についてのこのような関係については、実証的な研究はほとんどありませんが、流水と礫・砂・土などの粒子についてはよく研究されていますので、おおよその推定は可能です。わたくしの見積りでは、直径2.5mmの種子を動かせるには、水平方向に毎秒25cm、1mmの種子を浮遊させるには上向きに毎秒17cmの気流があればよいことになります。これはいろいろの仮定をおいたものなので一桁ぐらいは違うかも知れませんが、



ユキヤナギの花



岩壁のユキヤナギ群落

小さな種子が気流によって谷沿いに山を越える可能性を論証するには充分でしょう。むろん、その他の可能性としては鳥による運搬も否定できません。

美しく輝く山地河辺林、オオバヤナギ・ドロノキ群集

市ノ瀬のやや上流の柳谷川と岩屋俣谷川の合流点付近には、自然状態に近いヤナギ高木林が見られます。これはオオバヤナギ・ドロノキ群集とよばれるもので、太平洋側や北海道などではいわゆる亜高山帯の河辺林として典型的に発達するものですが、手取川では市ノ瀬の下流をふくめて山地帯（ブナ帯）の河岸の堆積物（河岸段丘、半安定帯から安定帯）上によく発達しています。オオバヤナギはヤナギ属に分類されることもありますが、ドロノキはポプラの仲間ハコヤナギ属に入ります。ドロノキが生育しているのは、県内では手取川上流だけです。これらの植物は樹木としての姿が美しいだけではなく、森林としては、

清流と山麓の間に帯のように位置をしめ景観をひきしめます。葉はつやつやとして陽の光を輝かせ、夏には涼しくて明るい林床をつくります。両者とも種子は1mm程度で白い綿毛冠をもち、晩春に訪れると風に乗って飛んでいくのが見られます。ドロノキは、大陸側をふくめて日本海をとりまくような分布域を持つ植物（環日本海分布）の一つですが、オオバヤナギは本州中部以北・北海道・千島南部に限られた分布をします。この群落は日本全体からみれば、ある程度の分布域をもつものですが、石川県ではここだけにしかない貴重な存在です。



オオバヤナギ・ドロノキ群集（柳谷川・岩屋俣谷川合流地点）

懐かしい川原の植生、ドクウツギ・アキグミ群集など

中流域から下流域の川原には、しばしばドクウツギ・アキグミ群集が形成されます。ここで川原というのは、乾燥性の半安定帯あるいは安定帯で砂礫の堆積物でできている平坦なものをいいます。やや低めの半安定帯側では多くの場合カワラハハコ・ヨモギ群集とよばれる美しい群落に接続し、より乾燥する場合にはさらにススキ群集に接続してクズ群落（林縁生つる・低木群落）となります。自然度の高い群落なのでノウサギなどのすみか

もあります。ドクウツギーアキグミ群集やカワラハハコ・ヨモギ群団は河川が長くても10数年程度の周期で、流水と砂礫の堆積により植生が破壊されなければ更新できない群落です。後者はかつては、犀川など県内の他の河川でも見られましたが、現在ではダムなどによる水位の管理が進み、ほとんど失われてしまいましたので、現在では前者とともに手取川だけに残存しています。アキグミはヒマラヤから北海道西部まで分布しますが、ドクウツギは近畿以北・北海道が分布域です。カワラハハコは高山のヤマハハコの亜種とされている植物で、種全体はヒマラヤから北海道まで分布しますが、カワラハハコ自体は日本全土にだけ分布します。



カワラハハコ・ヨモギ群落（下流域河口より2.4km 地点）

手取川の植物の保護の重要性

手取川にはこのほかにも上流の峡谷の岩場などに、イワギクやアサギリソウなど貴重な植物が生育しています。分布上重要な植物ですぐ絶滅のおそれのあるものはほかにもありますがあえて紹介しませんでした。本当はオキナグサなども全国的にはそれほど稀なものでなかったのに、山草栽培の流行によって絶滅に瀕しているところも少なくない状態なので、できれば従来どおり全く言及しないでおきたかったです。しかし、近年手取川での開発事業が活発におこなわれるようになり、さらに拍車がかげられる情勢です。今までのような対処の仕方では、知らない間にこれらの植物が闇から闇に葬りさらされてしまう危険が切迫してきました。たとえば、タマアジサイの生育する綿ヶ滝一帯やユキヤナギの咲く福岡橋付近、ドロノキの生い茂る市ノ瀬付近などでは、観光・レクリエーションのための整備がすすめられ、すでに部分的に失われたところもでてきています。これらの整備は公的機関が行ったものですし、また河川管理者などが許可しなければならないはずのものが大部分です。結局、手取川の貴重な植物の情報が行き届いていないことがひとつの問題でした。しかし、すべての貴重な植物の情報を公開すれば、心ない採取によって失われる危険があることは過去の苦い事例によって経験済みです。種名を具体的にあげて手取川の植物の危機について警告を発するとともに、採取が行われないように産地を伏せたのはこのためです。最も重要なのは開発計画の立案などにさいして、少なくとも専門家に問い合わせるなど実効あるアセスメント（事前環境影響評価）を徹底することでしょう。なお、ひとこと付け加えれば、ダム管理によって減少することが予想されるドクウツギーアキグミ群集なども、応用植物社会学の見地からは改善すべき余地の多い砂利採取のやりかたなどで追い打ちをかけられているのが実態です。手取川の植物は現在と未来の全人類の共通の財産です。また、地域の天然資源・文化財でもあります。ぜひみんなの善意と知恵と努力で保護したいものです。

古人は白山を美しい女神シラヤマヒメとしてあがめてきました。手取川はその黒髪ともいべき存在です。そして手取川の植物と花々はその髪を飾る花かずらなのです。

（金城高等学校）

白山麓の生祠

■尾添の開成社



小倉 学

尾口村一里野の景観

信仰的風土

白山麓は仏教信仰にきわめて篤い地域として知られる。みな浄土真宗大谷派なので、真宗の小王国とまでいわれている。集落には必ずお寺か道場があり、住民の信仰の拠点として護持されてきた。また住民は、家々に仏間を設けて立派な仏壇を置き、阿弥陀さんを安置し、先祖の位牌・法名を納めて家庭における信仰の中心と仰いできたのである。

越前から白山への登り口だった白峰村の白峰（300世帯・1,018人）には大小6カ寺もある。また加賀の登り口だった尾口村の尾添（86世帯・256人）には宗教法人のお寺はないが、6カ所の道場があって金沢や小松の大寺に属し、それぞれ門徒の信心・念仏の場として親しまれてきたのである。

かように真宗信仰の強烈な地帯ではあるが、日本人の固有信仰にもとづき地域の産土神として神社を祭ってきた。その神社も明治初年に神仏が分離されたはずなのに、今なお神仏習合の姿をとどめ、観音さんや阿弥陀さんを安置するところが多い。尾口村の尾添にある加宝神社は由緒のある古社として有名であるが、今も本地仏の虚空蔵菩薩を安置し、その垂迹だといわれる太玉命を祭神名としているのである。

以上はほんの一例にすぎないが、白山麓の信仰的風土の大体が察知されよう。ところが、その白山麓に、珍しくも“生祠”が祭られている事実は、民間信仰史上すこぶる注目されるのである。

生祠とは、生存中の人間に神格を認めて祭った神祠をいう。白山麓では尾口村尾添の一里野に開成社がある。大正12年(1923)、当時の石川県能美郡長である松本源祐を祭ったもので、白山麓最大のスキー場として賑わう一里野を見下ろす小丘の上に鎮座する。あまり知られていないので、その由来や意義などについて考えてみよう。

松本源祐と開成社の建立

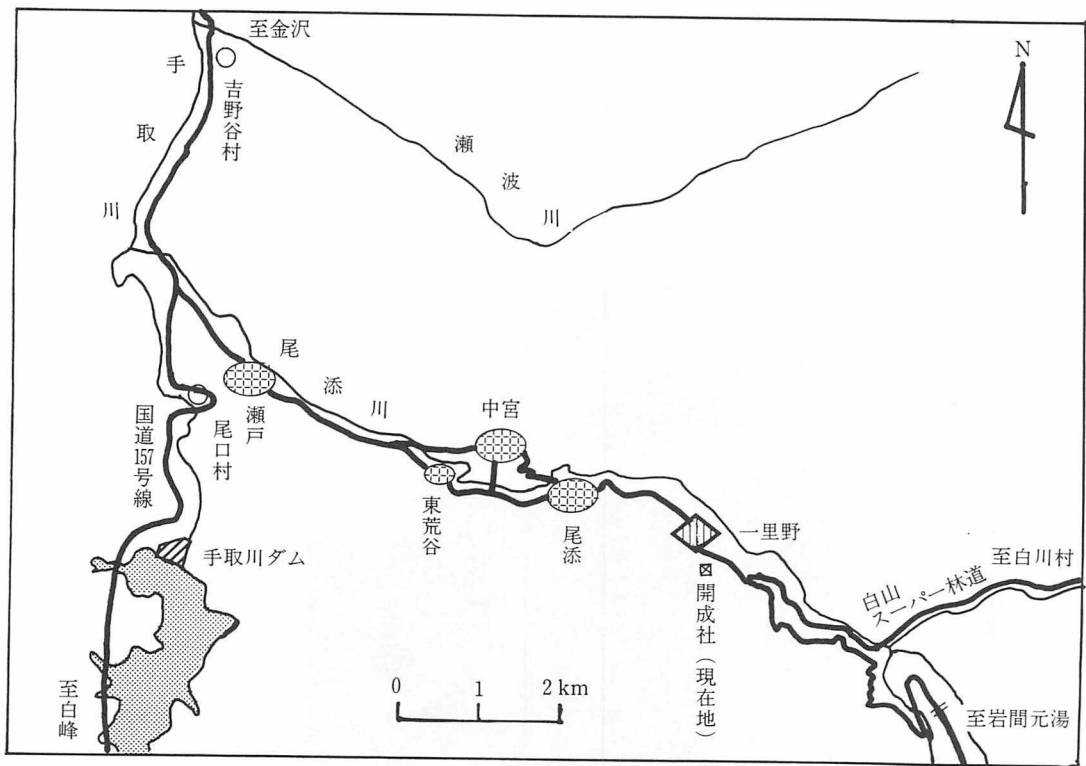
松本源祐は茨城県人で、栃木県巡査を振り出しに静岡・福井県などに勤めた。大正2年(1913)に石川県の羽咋郡や河北郡の書記となり、同3年に羽咋郡長、同8年に鳳至郡長、翌9年3月25日に能美郡長となった。赴任1カ月後の4月30日、当時能美郡だった尾口村の尾添に大火があり、災害は人家68・土蔵10・学校1・道場1、合計80棟。それは尾添の大半を焼失するという甚大なものだった。山麓の僻地で災害救助法もなかった当時としては、再起は不可能とみられたのである。

ところが松本郡長は、3年有余にわたり寝食を忘れ、身をていして救済と復興とにあたった。尾添の将来を考えて、

- (1) 岩間温泉の開発
- (2) 白山新道路の建設
- (3) 東荒谷・尾添間の道路新設

という空前絶後とまでいわれた大事業を起こして完遂したのである。能美郡会を動かして郡費の補助を得、尾口村長や尾添区長等を指揮し、住民の労力を集結して至難の工事を進め、一人の犠牲者も出さず、大正12年8月に完成をみたのである。

尾添の住民は感泣して喜び、郡長の恩徳に報いようと謝恩林を造成して贈ることにした。松本郡長が固辞してうけなかったので、郡長を生き神様として祭ろうと、尾添の西方の区有林に社殿を建立して郡長の大礼服姿の陶像を奉斎することにした。その像は高さ約30cmばかり、後ろに「石川県能美郡長従六位勲六等松本源祐」と彫った。



尾添・一里野周辺図

社名を「開成社」と名付けたのは、『易経』に『それ易は物を開き務めを成し、天下を冒ふ』とあるのによったのである。人のまだ知らないところを開発し、人のしようとするところを成しとげるという意味で、松本郡長の尾添復興の大業を誉めたたえた社名をつけたのである。鎮座祭が行なわれたのは大正12年8月で、時に松本郡長は48歳だった。わが身が生きながら祭られたことを聞いて、

『現世の我を齎くと聞きしより身のかしこさに心ちだるる』

『思ひきや加賀の白嶺の麓べにわれのみ霊の代々のこるとは』
と恐れおののく心境をよんでいるのである。

開成社の移転と再興

松本郡長は、開成社建立1年後の大正13年9月、郷里の茨城県行方郡長に転出し、その年の12月に勇退して同県の下妻市に住み、地方の教化に尽力、昭和25年5月14日に75歳で逝去した。

開成社は尾添の集落から遠く離れ、参拝にも不便なうえ管理も困難だった。そこで尾添の本村にある白山社（白山下山仏を安置）の境内に移築した。ところが昭和25年の冬、開成社は雪崩のため倒壊し、とりあえず御神体の郡長の神像を白山社に移した。間もなく松本郡長が逝去したのは不思議な因縁だといわねばなるまい。

それから27年間、過疎のムラでは開成社の再建は困難だったので、昭和52年に尾添の氏神社の加宝神社に遷座して護持することとした。ちょうどその頃、手取川ダムの建設とともに、白山国立公園の観光基地として尾添の一里野の開発整備事業が進められていた。一里野は尾添地区の最奥地に位置し、田畑や林野の続く出作り地となり、昔の白山禅定道も遺っていた。ここに岩間温泉から引湯し、スキー場を建設、さらに岐阜県に通ずる白山スーパー林道も開通して白山麓最大の観光・行楽の拠点となろうとしていた。

そこで開成社を一里野に再建することにした。一里野の開発をば、50数年前の松本郡長の偉業を継承発展する大業だとし、一里野に開成社を再建して守護神と仰ごうとしたので



開成社の再建慶賀祭
(昭和57年11月25日)



松本源祐（大正4年の礼服姿）



開成社に祭られている松本源祐の神像

ある。所要経費も開発事業にともなう見返りとして協力が得られることになった。

再建の計画を急速に推進させる出来事があった。それは松本郡長の五男三女をはじめとする親族が東京・茨城・千葉から揃って尾添を訪れ、父の神像に直面して開成社の護持について深甚なる謝意を表された事実である。昭和54年10月2日のことで、このとき尾口村長をはじめ村議会議長・尾添区長からも郡長の恩義に対する謝恩の挨拶とともに、開成社再建の計画が報告された。

こうして一里野温泉スキー場に隣接する丘陵上に開成社を新築し、郡長の神像を遷座したのが昭

和57年11月24日で、翌日には慶賀の祭典をあげた。新しい社殿は総檜材の一間社流造りである。松本郡長の一族を迎え、尾口村長以下参列し、村議会議長が村民を代表して祭詞を奏上した。郡長の長男である保平氏(明治35年生)が、現実には郡長を知らない世代となったのかかわらず、開成社を再建して盛大なる祭典をあげていただいたことに対する感激の謝辞を切々と述べられ、一同が強い感銘を受けた思い出は今も忘れられない。

見事に再興された開成社は尾添区の公的施設となり、維持のため基本財産を設け、日常の管理は氏子総代を選んで、春秋の祭り日には尾添区からお供えをし、一里野在住者の参拝も見られるようになったのである。

生祠としての意義

およそ特定の人間を神として祭る行為は、その死後になされるのが通常である。古くは氏族の祖神すなわち氏神として祭る場合が多かった。また怨みやタタリを鎮めようとした御霊信仰にもとづくものもあった。ところが後世になると、生前の功績をたたえて祭ることが多くみられるようになったのである。

これに対して、生前に生き神様として祭る行為は主として近世に入ってから多く見られるようになった。祭られたのは、たいていは民政に尽力した人物である。藩主をトップとして藩の役人や庄屋（加賀藩では十村）や肝煎クラスが多く、関係地域の住民によって生き神様として祭られたのである。こうした傾向は近代以降もみられたので、一般庶民の信仰実態が知られる意味で民俗学上の重要な研究対象となる。石川県内の生祠としては、開成社のほかに、

- (1) 延宝元年(1673)頃の成立といわれる加賀藩5代の藩主前田綱紀の生祠（河北郡津幡町の加賀神社）

(2) 享保13年(1728)頃の成立といわれる加賀藩の十村だった中橋久左衛門の生祠(羽咋郡志雄町の菅原神社内)

が現存する。この両社に比べると開成社には下記の特徴が見出される。

第一は大正12年(1923)という最近代における生祠であり、その由来がきわめて明確である点。

第二は世の多くの生祠が歳月の経過とともに信仰心がうすれていくのが普通であるのに、開成社は今に至るまで変わらず、近年は好地を選んで見事に新築再建し、いわゆる生祠から地域の守護神に発展している点。

第三は祭神の一族が健在で、その一族が毎年はるばると関東から参拝するという生祠信仰史上注目すべき点。

松本郡長の五男三女は香風会という一族会をつくり、昭和54年をはじめとして57年からは毎年の開成社参拝を恒例行事として欠かさない。昭和63年9月には一族20人が来村している。高齢の長男長女は近年逝去したが他は健在で、みな教育界で活躍された。もっとも若い五男磐祐氏は文学博士で筑峯と号し東洋書道芸術学会を主宰する破体書の大家として知られるが、すでに古稀を越え、開成社の対応は今や郡長の孫の時代に移ろうとしている。しかし新世代となっても、郡長の

『いつかたに住ひなすとも千代八千代我の血筋の者は忘るな』
という歌の心を遺訓として守り続けていくであろう。

松本郡長を生祠に祭ったのは、焦土と化して再起不能とまでみられた尾添地区を、3年有余にわたって復興に尽瘁した献身的努力、それは世の渡り官僚の郡長にはみることのできない至誠に動かされたのである。この至誠に対する住民の報謝の念が開成社となつてあらわれたのである。

ひたすらに弥陀の本願にすがる真宗信仰の強烈な白山麓地帯において、生祠を建立するのは類例のないことだった。それは宗教を超越して恩義に報謝するという道義観念にもとづくものと解せられるのである。その生祠を今も護持して初心を忘れないのは、律義な村民性によるといえよう。

(国立石川高専名誉教授)



一里野の開成社

ハクサンマリモ？ 実はホソカワモズク

■ 梅 典雅

1988年の10月 加賀禪定道を下っていた私たち一行は、標高2,000mあたりの小さな池（池塘）に、マリモ様の植物を発見しました。直径が5～8cmくらいで、7個と3個が別々に集まり、深さ10cm程度の水中に浮遊している状態でした。

昨年、富山県の立山町でマリモが見つかり、タテヤママリモ（仮称）と新聞で報道されたこともあったので、私たちは『ハクサンマリモか？』と色めき立ったわけです。

そこで一部を採取し、東邦大学の吉崎 誠博士に同定を依頼したところ、次のようなお手紙をいただきました。

池塘に浮かぶ
ホソカワモズク



拡大写真（吉崎博士提供）

〈吉崎博士よりの手紙（一部抜粋）〉

ご依頼の件について返事を申し上げます。送られてきた白山産のカワモズクは、輸生枝と、雌の生殖器官である造果枝と、受精毛の形態（写真）とからホソカワモズク (*Batrachospermum keratophyllum* Bory) と同定しました。この種類は、我国では北海道や、中部日本の高山域の細い川の流れや、池塘等に生育するもので、生鮮時は緑色からオリーブがかった緑色で、小石や枯れ枝に付着して生育しますが、時に基物から離れて浮遊し、球形になることもあります。

お手紙によりますと、ホソカワモズクの生育期は5～8月で、そのころには池底の基物に付着して、たくさん群がって生育しているということです。つまり、採取した10月はホソカワモズクの生育時期としては終りに近いところで、基物から離れた体が、風によるさざ波にもまれているうちに、マリモのような球形になったということでしょう。

確かに、池塘は尾根の上であって、風当りの強い場所でした。また、カワモズクの体は一年生の配偶体（雌雄のある生殖体）で、生育地にはチャントランシアという、小さくて見つけにくい多年生の体が必ずあるはずだということです。

残念ながら、ハクサンマリモと命名することはできませんでしたが、ホソカワモズクは、白山からはたぶん未発表であり、西限の可能性もあります。いずれにしても、まだ本格的に研究されていない淡水藻類なので、白山からも新種が見つかるかもしれません。

最後になりましたが、種々御教示いただきました吉崎先生及び元金沢大学理学部教授の里見信生氏に、厚くお礼申し上げます。
(石川県自然保護課)

下田原の自然の中で暮らして

山口清太郎さん



岩田 憲三

キャーチの前に立つ山口さん

出作りとは

山口清太郎さん（85才）は、今年も元気に白峰村下田原へ『出作り』にきました。出作りというのは、かつて白山麓山村で見られた生活形態で、夏冬で居住地や生業を異にする一種の二重生活をいいます。雪の深い冬期（11月～4月）には、白峰村字桑島や同字白峰といった集落（本村または母体という）にある本宅でワラ細工や織物といった屋内作業に主

として従事し、夏期（4月～11月）には山間部の出作り地の住居に移って焼畑・養蚕・炭焼きなどを行なう、というのが出作りです。この他、年間を通して本村に住むことなく、山間部の住居ですっと生活するのも出作りの範疇に入れています。一般に前者を季節出作り、後者を永住出作りと呼んでいます。

下田原の生活

しかしながら、こうした出作り生活に従事している人は年々少なくなり、今では白峰村に僅か数戸残っているにすぎません。山口さんは数少ない出作り従事者の一人で、夏期には下田原で出作りを行ない、冬期には金沢の自宅へ帰ります（以前は桑島本村の自宅へ帰った）。

山口さんの出作り地は標高約710mの、下田原川ほとりにあり、水の便が良くて雪崩の心配がない場所です。周辺はブナやミズナラ

などの落葉広葉樹林に囲まれ、木の実・キノコなどの食用植物にも恵まれています。かつて白山麓全体で出作りが盛んであった昭和30年代には、山口さん一家もこの地を拠点として春から秋の間、焼畑や炭焼きを行なって下田原で生活を送っていました。しかし昭和40年代になると炭の需要が減少し、炭焼きは現金収入源としての役割を終え、近年は山口さんと奥さんの老夫婦だけで下田原で夏期に出作りに来るようになりました。そして、激し



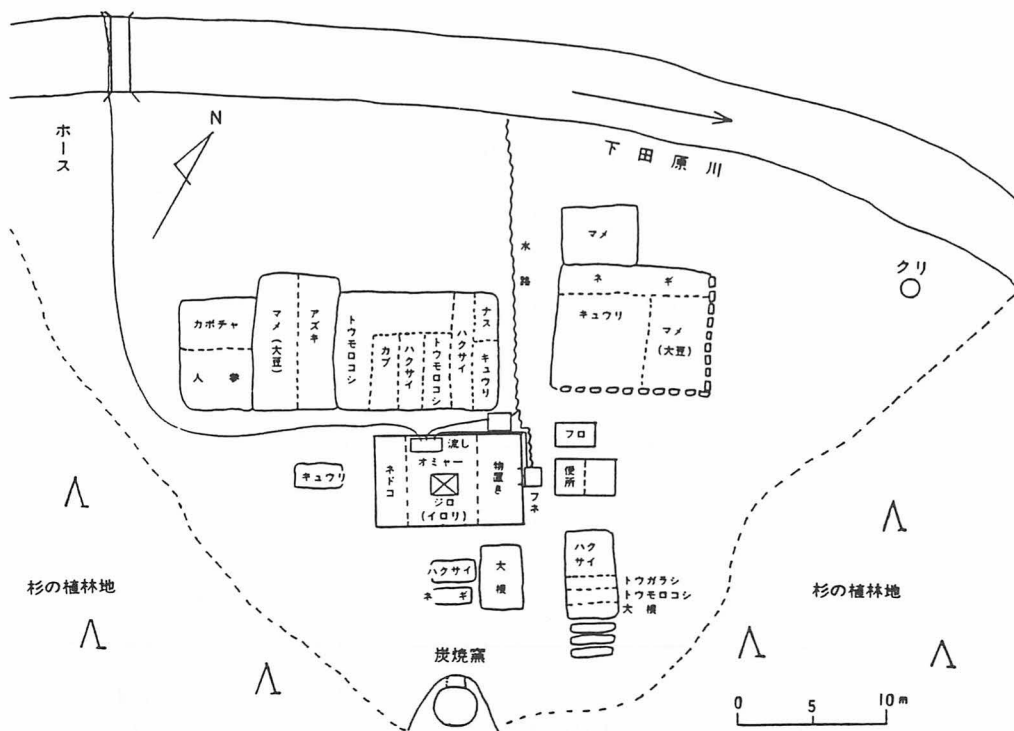
下田原の出作り

い肉体労働を要する焼畑や炭焼きはもはや行なわず、住居周辺のキャーチと呼ばれる常畑での野菜・穀物栽培や杉の手入れなどが主な仕事となっています。

山口さんとお会いして話をするたびに思うのですが、85才という高齢をまったく感じさ

せないほど若々しく元気で、しかも昔の色々な事柄を実によく記憶しています。筆者が昨年出作りの調査を実施した際には、昔の下田原について事細かに教えていただきました。ある時、『いつまでもそんなにお元氣な秘訣はなんですか?』と尋ねると、『山の中でうまい空気を吸って、山仕事で体を動かし、山で採れるモノを食べるからかもしれん。』と答えて下さいました。10月上旬に訪れた際には、既に薪ストーブ(数年前までは、イロリを使っていた)を焚いていたほど冷え込みが厳しい下田原ですが、当地での出作りは山口さんにとっては最も暮らしやすく、また健康にもよい生活なのではないでしょうか。11月には金沢の自宅に帰られましたが、来年はもちろん体の許す限り出作りを続けていただきたいものです。

(白山自然保護センター)



下田原セイシ山の出作り地

たより

山の樹木の葉が落ち、山里にも雪が積もる季節になりました。今年もどうやら暖冬のように、これで3年連続になります。中宮展示館は11月10日に閉館し、来春までお休みです。今年は、展示館の前を走る白山スーパー林道が全線二車線通行可能となったため、たくさんの観光客が訪れました。展示館には、昨年より約80%増の61,588人の入館者がありました。10月だけでも23,000人が展示館を訪れ、休日・平日にかかわらず万遍なく多くの入館者がありました。また、ブナオ山観察舎は例年どおり11月20日に開館しました。ブナオ山のニホンカモシカやニホンザルは今シーズンもまた、元気な姿を見せてくれるでしょう。

今回の『はくさん』では、白山麓の民俗研究の専門家である小倉 学氏に、県内でもあまり例の少ない“生祠”を紹介してもらいました。こうした事例を通して、白山麓では報謝の念が大変強いことがわかります。また、古池 博氏には前回（第15巻4号）に続いて白山地域の植生について書いていただきました。今回は、手取川流域の貴重植物の分布や河川地形との関係、そして開発の波の中でいかに植物を保護していくかといったことなどについて紹介していただきました。

目 次

表紙 尾口村深瀬のイワナ養殖	1
手取川の植物	古池 博 2
白山麓の生祠—尾添の開成社	小倉 学 8
こんな発見、あんな記録7 ハクサンマリモ?実はホソカワモズク	
	梅 典雅 13
山に生きる10 下田原の自然の中で暮らして—山口清太郎さん	
	岩田 憲二 14

はくさん 第16巻 第3号 (通巻69号)

発行日 1988年12月24日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂